

## AFBFの船出！

社団法人 日本ボディビル連盟会長  
IFBB 執行評議会メンバー 玉利 齊

IFBBは2009年7月24～27日の間、アジア各国のボディビル連盟の代表をインドのオーランガバードに招集して総会を開催した。この席でIFBBは、アジア大陸の新しいボディビル組織としてアジアボディビルフィットネス連盟(AFBBF)の設立を発表した。同時に2009年アジアボディビル選手権も開催され韓国が4個、バーレーンが2個、カタールが1個、日本が1個の金メダルを獲得した。この記念すべき第一回目のアジアボディビル選手権大会を開催した新しいアジア大陸のボディビル組織であるAFBBFには現在インド、バーレーン、クエート、カタール、スリランカ、日本、韓国、中国、カザフスタン、ウズベキスタン、モンゴル、バングラディシュ、パレスティナ、イラク、レバノン、ヨルダン、ミャンマー、アフガニスタン、シリアなどが参加を表明し、役員人事としては、会長がバーレーン、事務総長がインド、副会長には日本・韓国・カタール・クエート・スリランカ・中国・パレスティナなどが名を連ねている。

では何故このような事態になったのか。従来アジア大陸にはABBFという組織があり、2002年には他の大陸連盟に先駆けてアジア競技会に正式種目として参加した実績をもち、IFBBのなかにあってもその存在は輝かしいものであった。ところが、そんなABBFの先導者で事務総長でもあったはずのポール・チュア氏が、IFBBのルールに違反し、その上IFBBに徹底的に反発していることが明るみに出たのである。この発端は2006年にボディビルが二回目の参加を実現したドーハのアジア競技会に、前年のアジアボディビル選手権のドーピングテストで、WADAによって陽性が確定されていた香港の3選手を、その事実をIFBBに報告せず大会に出場させていたのである。そのうちのひとり金メダルを獲得し、他の2名もそれぞれ銀メダルと5位に入賞したのだが、いずれの選手もドーピングテスト陽性者扱いになっていなかったことが後に判明した。このような事実をIFBBはWADAから初めて知らされ、WADAからは次のような警告を受けている。「本件が事実発覚後、これほど長期間放置されたままになって今頃になって問題視されるのは不幸なことではあるが、現時点できちんと決着をつけることで、いかなる不正行為も必ず発覚して処分の対象になることを周知徹底させることが絶対に必要である」と。

以上がWADAの情報管理・法務担当の責任者が、IFBBの事務局次長に出した通知の一部である。これを受けてIFBBはABBFのポール・チュア事務総長に、ただちにこの一件の報告書の提出を求めたが、「シンガポールと香港両国の司法機関である腐敗防止委員会から査察を受けて文書を全て押収されているので応じられない」ということだった。

そこでIFBBは独自の調査を開始したところABBFは、逆にIFBBの組織自体を否定し始め、再三の警告にもかかわらずIFBBに対する敵意を露骨にしてABBF加盟国に呼びかけて、反IFBB工作をエスカレートさせてきた。そこでやむをえずABBFを、IFBB公認の大陸連盟としての資格を停止し、会長・事務総長・審査委員長・他2名を資格停止という処分にしたのである。

この様な状況で一番迷惑するのは、アジア各国のボディビル連盟と選手たちである。現実にはイランで8月に開催されるはずだったABBF主催アジアボディビル選手権大会は中止された。表向

きの理由は政情不安ということであるが、実際は、IFBBとABBFの軋轢に板ばさみになって開催出来なくなったのではないだろうか。

ところで、今年度12月に香港で東アジア競技会を開催予定で、ボディビルも参加種目になっていたが、香港ボディビル連盟がABBFに同調して反IFBBの動きを見せているため、東アジア競技会のボディビル選手権大会の受け皿としては難しく、2009年東アジア競技会にボディビルの不参加はやむを得ないという事態になってしまった。またABBFは、イランのアジア選手権の代替としてタイのバタヤで10月に開催を予定しているが、現在同調している国は20カ国ちょっとなら見られる。この様な混乱を一刻も早く収集するためにIFBBがバックアップして設立されたのがAFBFだといえる。

さて、JBBFの今後の方向性はどのようなのだろうか。もちろんJBBFの立場は明確である。JBBFはIFBBの一員なのであるから。

その第一の理由としては、IFBBもJBBFも共に究極の目標としているのはオリンピックに正式種目として参加することである。それには、スポーツ種目の国際組織である国際連盟(IF)であるIFBBが、国際オリンピック委員会(IOC)の承認団体になっていることが前提条件となる。IFでなければ承認団体になることはできないのである。各国のNOC(各国オリンピック委員会)に加盟することは、そのスポーツの国内統一団体であることと、IFに加盟していることなのである。つまり国際組織に認められた団体でなければ、国内のオリンピック委員会への加盟が認められないためにJBBFは、ボディビルの日本における統括団体としてIFBBに加盟しているのでJOCに正式加盟が承認されている。したがってIOCがボディビル、つまりIFBBを承認すればオリンピック参加の可能性は大きく前進する。以上の理由から、JBBFはIFBBと行動を共にする。

第二の理由は、スポーツ競技団体として評価を高めていくためにはルールを守り、社会性のある選手たちが育つような指導性を発揮することが重要であり、今回の問題は、アジア競技会に出場させるためにドーピングテストの結果を無視して出場させたことはルールを守っている選手や競技団体に対する冒瀆であると判断し、現在のABBFを信頼することはもはやできない。

第三の理由として現在ドーピング問題は、スポーツ界最大の問題であること。21世紀にスポーツが人類に夢や感動を与えて人間の進歩と向上に資する存在であり続けるためには、ドーピングをスポーツ界から廃絶しなければならない。ましてボディビルは、IOCから承認を外された理由のひとつにアンチドーピングが不徹底で不明確な点があると見られた経緯があるだけに今回の問題を個人でなくABBFの組織ぐるみで起こしたことは許されることではない。

第四には、国際スポーツ界の信頼と協調を得なければボディビルの発展はありえないということ。国際スポーツ界とはIOCを始め、IOCが連携しているGAISFやWADA、OCAや各国のNOCなどのことを指す。IFBBはこれらの組織と協調・連携している国際スポーツ団体である。

第五には、国際スポーツ界の常識として、上部団体のルールが下部団体のルールより優先することは明らかである。いうならば、ABBFのルールや取り決めは、IFBBのルールに決定されるべきであり、これに反してあえて矛盾を行なっているのが今回のABBFの一連の動きといえる。

以上の様な理由からJBBFはIFBBを支持して新しいアジアボディビル連盟に参加した。しかしこの間ABBFから届くのはIFBBに対する悪意に満ちた情報ばかりで、IFBBからは殆ど情報がこなく正しい判断をするのに苦慮した。私はできるかぎり客観性のある情報を得るためにIFBBの創立者であり、ボディビルの父と言われ60年に渡ってIFBBの会長として160カ国のボディビル連盟

から敬愛されたベン・ウィダー元会長の秘書兼事務局長(現在)であるパメラ・ケイガン女史に問い合わせの書簡をしたためた。

「一体どうなっているんだ。ウィダー会長が亡くなってわずかの間なのに、ABBFから送られてくる文書は、IFBBとその幹部に対する悪口雑言ばかり。正しい判断をしたいので貴女の意見を聞かせて欲しい」と言ったところ直ちに返事がきた。

「貴方から書簡をもらって大変嬉しかった。貴方は正しい意見を率直に言ってくれるので、ウィダー元会長が最も信頼していた人だった。今回の一件は、現在IFBB会長であるラファエル・サントンハ氏が解決するために全責任を負って活動しているので、彼を全面的に信頼して助けてやって欲しい」とのことだった。私はパメラ女史に書簡を出すのに先立ってABBFの事務総長ポール・チュア氏に次の様な書簡を送っていた。

「私は貴方との友情は個人としては尊重するが、今回のIFBBに対する行動は納得できない。いきなりABBFとIFBBの組織間の対立抗争に持ち込むことは、世界のボディビル界の秩序のために最悪の事態を招く。まして貴方はIFBBのナンバー2であり、会長特別補佐ではないか。意見の違いがあるならIFBBの組織内の問題として話し合いで解決するべきだ。ABBF加盟の各国連盟は同時にIFBB加盟連盟でもあるのだから、彼らを混乱させるだけだ」とメールで送っていたので、その写しをパメラ女史にも送っておいた。

ポール・チュア氏からはその後もABBFの動きをサポートする文書を送ってくれとか、自分の立場の正当性を主張するが故のIFBBを否定する文書が毎日のように送られ続けている。

一方IFBBは、国際スポーツ界としっかり連携をとりながら問題解決の歩みを着実に進めている。一例を挙げれば、7月14日から台湾の高雄で行なわれたGAISFにインクルードされているIWGA主催の第8回ワールドゲームズ大会にはサントンハ会長も出席し、積極的にGAISFやIWGAの幹部たちと会談し、さらにJOCの水野副会長、市原専務理事とも会い、ABBFの混乱の実態をよく説明している。勿論私とも2時間近く打ち合わせを行ない今後のIFBBの方向性についても話し合った。

以上が今回の“ABBFの乱”とも言える一連の顛末であるが、事態はまだ収束した訳ではなくABBFは、OCAの一部の幹部を巻き込んで不明朗な動きを見せている。しかし時間の経過によって正しく状況を理解したアジア各国のNOC傘下の各国ボディビル連盟の一部が、現在はABBF寄りであっても、新生AFBFに徐々に集まってくるのは時間の問題であろう。

私はオーランガバードのホテルで澄んだ夜空に輝く南十字星を仰ぎながらボディビルの過去・現在・未来にひとり想いを馳せて、新生AFBF号が、大海原を真っ直ぐ進んでいく航跡を思い描いていた。